

『光のある間に』ヨハネ12:33-36

12:33 イエスはこう言って、自分がどんな死に方で死のうとしていたかを、お示しになったのである。

12:34 すると群衆はイエスにむかって言った、「わたしたちは律法によって、キリストはいつまでも生きておいでになるのだ、と聞いていました。それなのに、どうして人の子は上げられねばならないと、言われるのですか。その人の子とは、だれのことですか」。

12:35 そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。

12:36 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。イエスはこれらのことを話してから、そこを立ち去って、彼らから身をお隠しになった。

●序論

私たちの教団では、8月15日を信教の自由を守る日としています。それは、この世とこの日本で生きる中で、神を愛し、そしてこの国を愛する。そういう中で、信仰に生きる自由を守るために祈る日として挙げられているように思っています。

聖書の中で、イエス・キリストのはっきりとした言葉が取り上げられています。

「神は、そのひとり子をくださるほどにこの世を愛された」。

神さまは、「だれか…」という表現ではなく、「この世」に関心を持ち、愛されていると語ります。

現実には、いかにも歪んでいる世の中や人々がいます。そしてどんな価値観があろうとも、そんな「世」を、神は愛して、独り子イエスをお送りくださったのです。そのうえで「御子を信じる者が一人も滅びることなく、永遠のいのちを得るためである」と。…つまり、そういう世の中だからダメだ…という言い方をせず、その中に独り子を遣わし、「信仰の事柄、救いの事柄、永遠のいのちの事柄」を語りだしています。

そういう意味で、「闇に追いつかれないように…」とあるみ言葉は大切です。

この世で直面するすべての事柄を「信仰によって生きる事柄」としてとらえて、主イエスの生きざまに模範を見ていくことの大切さを知るのです。

振り返って、イエスさまが遣わされた時代は、ローマ帝国の支配と圧政の時代でした。一方でユダヤ人たちの信仰が律法主義に陥り、愛が冷えていた時代でもありました。

イエスさまは、そういうこの世に無関心な存在として生きられたのではなく、その時代の中で、誠実に生き、また仕え、そして、その時代とこの世のすべての罪の負債を背負って十字架への道を歩まれたのです。

イエスさまがなされたことは、そういう世において、聖書が語る神の思い、神の国と神の愛を明らかにするというお働きであったことを、わたしたちは思い起こすのです。わたしたちは生き方を、このイエスに求めなければなりません。

●本論

I. イエスを信じることです。

12:35 そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。

「もうしばらくの間」というのは、ただ<期間の猶予>を示しているだけではありません。<時間の制限>も示しています。

聖書が語る「携挙」つまり、イエス・キリストを信じるクリスチャンが、突然、一瞬にして天に挙げられるという出来事について…。

わたしたちは、その時が区切りであることを意識しています。だから、…

12:36 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。

この言葉は真実です。そしてヨハネの福音書では、こういう言葉も聞いていました。

ヨハネ9:4-5 「わたしたちは、わたしをつかわされたかたのわざを、昼の間にしなければならない。夜が来る。すると、だれも働けなくなる。わたしは、この世にいる間は、世の光である」。

「光のある間」それはつまり、イエスさまが十字架にかけられるまでの間、そして今を生きる私たちにとって、再びイエスさまが来られる最後の日までの間…ということができのでしょうか。

この与えられた時間というチャンスに、イエス・キリストを信じなければ、永遠に救いのチャンスは失われてしまう。ということが語られているのです。

12:36 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。

それは、今はチャンスがあるということです。わたしにとって、あなたにとって、あなたの家族にとって、あなたの友人たちにとって、今は救いを受け取ることのできる機会があるということを示しているのです。

2コリント6:2 「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。」

II. イエスとともに歩むことです

12:35 そこでイエスは彼らに言われた、「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない。

「闇」「闇の中を歩く」とは光であるキリストを持たない人生を歩むことを意味します。

「やみの中を歩く者は、自分がどこへ行くのかわかっていない」と言われているように、何のために生きているのか、どこへ行くのか、そういうった人生の目的や目標を失う人生を意味します。

ある人は、自分の人生はこの仕事、この財産、この地位と、この人脈、この健康…などと、誇りにするかもしれませんが、けれどもそれを失うこともあるのです。

そういう時は、一見闇と思えるかもしれません。

しかし、クリスチャンは、それよりももっと大切なものを持っています。それが「光」という存在であり、私たちの人生のどこでも良いご計画をお持ちのイエス様ご自身です。

私たちはこの方に生かされ、この方とともに生きることができるです。

たとえどんな時でも、「わたしにはイエスさまがついているから大丈夫…」と言える歩みがわたしたちには与えられているのです。

そういう歩みの中心にあるのが、礼拝生活です。礼拝生活があってこそ、日々神さまの恵みと御業に心が向けられ、健全な関心と霊的な視野と希望が与えられるのです。

この中には、うまくいかないでいる人、体調の悪い人、問題を抱えたままの人も共にいます。だからこそ、その方のために、そういう方々と共に、神さまのみ言葉によって、励ましあって神さまを見上げることができるのです。それがこの礼拝です。

Ⅲ. イエスを信じること、伝えることです

もう一度イエスさまの言葉を聞きましょう。

12:35 …「もうしばらくの間、光はあなたがたと一緒にここにある。光がある間に歩いて、やみに追いつかれないようにしなさい。

わたしたちは、しばしば、与えられている時間や機会や出会いがどれほど恵まれたものであるか…ということに気づいていないことがあります。

時間をつくられた神様は、また制限を設けられました。しかし制限を設けるだけでなく、そこに「チャレンジ」を。そして「チャンス」を与えて下さっていることを知っていただきたいのです。

わたしたちに与えられている時間は、恵みに満ちあふれています。

まさに「救い」があるからです。

1コリント6:2 神はこう言われる、／「わたしは、恵みの時にあなたの願いを聞きいれ、／救の日にあなたを助けた」。見よ、今は恵みの時、見よ、今は救の日である。

つまり、この時こそ、「光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」と言われる言葉に応答することのできる機会なのです。

以前にも紹介したことのある、105歳まで現役の医師として勤めたクリスチャンの医師 日野原重明先生が自分の経験に照らしてこんな風に語っていました。

「人間はいつ死ぬかわからない。これを心から実感できたのは、「よど号事件」と呼ばれるハイジャック事件で人質になったときです。あのハプニングのあとは、毎日がより大事になりました。」

今日、与えられているこの一日という時間が、ただの過ぎていくだけの当たり前のものではなく、とても大切なものとしてとらえられるようになったというのです。

この日野原先生は、のちに多くの小中学校で「いのちの授業」を行い、そこで子どもたちに「いのちとはね、与えられている時間のことだよ」とお話になっていたということです。

そう思うと、余計にイエスさまが語られる言葉は大切です。

12:36 光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。

今こそ、「光の子となりたい」「光の子でありたい」そう、強い願いと思いをもってもらいたい、とチャレンジされているのです。

そして、もうひとつ。わたしたちは福音を伝える”時”が与えられていることも忘れてはなりません。

2テモテ4:2 御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。

その続きにはこうあるからです。

4:3-4 だれも健全な教えを聞こうとしない時が来ます。そのとき、人々は自分に都合の良いことを聞こうと、好き勝手に教師たちを寄せ集め、真理から耳を背け、作り話の方にそれて行くようになります。

人は、現実に都合の良いように、都合の良いことを聞こうとするようになりやすい、そうしていくつもの歴史上での過ちがあったことを忘れてはなりません。

さいごに)

「光のある間に」。それは、私自身へのチャレンジでもあります。この与えられている時を誠実に、福音宣教の使命を果たしていくことです。

先日の先輩牧師の葬儀の際に読まれたみ言葉を紹介しておきます。

2テモテ4:6-8 …私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。

「光のある間に」。これは、伝道者・牧師に限らず、この地上でイエス・キリストという「光」と出会ったすべての人に促されるチャレンジだと信じます。

12:36 「光のある間に、光の子となるために、光を信じなさい」。